

その後起つた財界の恐慌、關東の大震災等には無論他の事業と同様相當の打撃は蒙つたが、割合に堅實な歩みを見せて今日は内地産原料の殆ど全部を消化してゐる。

紡績科も立つて十年、あわたゞしい創立から景氣の頂點に、景氣の頂點から不景氣のドン底に、種々な經路を辿つてとにかく茲まで來た、いつしよにやつて來た清水さんは一昨年教授になつた岡教授は五月に英國へ留學された、卒業生の就職も不景氣に押されて大分問題だつたがこの頃は他校に比べてもずんとい。

大底十年と言へば一つの仕事は完成されてもよい、少くとも一區切りつけてまたスタートするのもよいことだらう、自分としてもそう考へてゐるが生憎なことに世は不景氣續きだから不足勝ちな豫算を會計課と喧嘩しながら研究寮の奥深く沈澱してゐる。

紡績科の卒業生は第一回九名、二回十六名、三回八名、四回十二名、五回十三名、六回十一名、七回十五名、八回十一名、合計八十七名、これに紡績科の出來ない時分に製糸科を出たもので、紡績に行き又は今やめて居つても紡績へ行つたものを舉げて見ると一回七名、二回二名、三回二名、四回七名、五回五名、六回四名、七回六名、八回三名、合計三十六名、といふことになる、それらの人達の出來事を拾つて見たら面白い漫談が出來るだらうが今はこの位で筆を擱かう。(紡績部便りは別に杉木君が書いて呉れる筈だから現狀はそれによつて知つて置きたい)。

## 神様の様な東寮のお爺さん

ごお婆さん

貫ちやん

親愛なる東寮の百參拾五名の卒業生諸君。

創立以來十九年の光榮ある古き歴史を有する我が東寮は、龜屋と云ふ大家の破産と共に某銀行の抵當となり、遂に昔の南寮に移轉せなければならぬ破目に陥りました。

これよりさき來るべき二十周年記念まで、せめて東寮のあらん限りをと全生命を賭して働きつゝあつた、あの元氣な東寮の清水良吉爺さん(八十歳)とお丈婆さん(七十四歳)が極度に老衰して突然職を辭めて、目下郷里にて衰れなる晩年を送りつゝあります。

神宮皇后の様な男勝りの婆さんは、三月中旬頃學生の學年試験勉強中なので、自分がいくら好きな芝居だからと云ふて學生が一生懸命勉強して居るのに自分だけ呑氣さうに芝居を見に行くことは出來ないとして、飯よりも好きな見度い芝居を廢して、専ら試験準備中の學生のお料理に精進して居つた時であります。その頃から少し體に無理をした爲めか、偶々痔疾を煩ひ、四月十日の日か日の出町の宮櫻の風呂へ行つた時である。洗ひ場は多量の出血の爲めに紅に染まつた。入浴中の一婦人はこれに氣附き痔疾の由を告げ背中へお湯を掛けて下さいました。暫くの間休んで東寮

に歸りました。婆さんもこれには自分乍ら驚き、昔房山の老婆が劇場で痔の爲めに數合出血して歸宅した所が又澤山に血が下り、遂に死んだとの話を連想して、婆さん自身も爺さんも非常に憐微悪く感じ、それ以來何んとなしく衰弱し始めた様である。其後婆さんは小康を得て元氣となり、好きな芝居にも行く様になりました。

爺さんは又二月以來時々風邪を引き、特に四月の末頃には強度の風邪に罹り、聲は吼れ、痰は咽喉に絡り、顔色蒼白となり、遂に病床に伏してしまつた。婆さんが八、九年前から神經痲痺を煩つて以來右半身の自由を失ひ水汲みが出来ないので病軀を押し寄池賣物店の前の井戸から腰を屈め、息切れをしながら二、三日續けて水汲みをしました。水汲みが終ると一安心して、學生にも婆さんにも一言も言葉を掛けず溜息をつきながら寝て居りました。その内に爺さんは熱の爲めに足の自由を失ひ、腰が抜けた有様となつたので四月一日の晩、學生にも相談なく、人力車を雇ひ郷里にて靜養すべく歸宅したのであります。

爺さんが家に歸へつてからは婆さんが一人元氣で、十日許り一生懸命に炊事をして居りました。爺さんが居らないので水汲みも自由に出來ず、五升の鍋釜の上げ下ろしも思ふ様に出來ず、遂に又婆さんも身心極度に疲弊し、又蒲團を敷いて寝込んでしまつた。そこで早速東寮の舍監なる小澤先生にその由を告げ、翌日校長先生にお合ひし、退くべき理由を述べ、五月十二、三日の頃山口より後任の人の來るのを待つて東寮にお暇乞をしました。其の

隣針塚校長先生が二十年祝ひにはよんで下さると云ふたとて喜んで居りました。そして「自分でも二十年祝ひまでは是非や度いと思つて居たが、爺さんは体が弱くなつたし、俺は動けなくなるし、何とも仕様がな」と涙を流して話をなされました。かくして爺さんも婆さんも十九年間住み馴れた東寮を後に縁を切らなければならなかつた。

爺さんの實家は東寮を出でて上州街道を北へ北へと神川に沿ひて進むこと約二里、雄大な千古の溜で有名な傍陽より流れ來る洗馬川と神川と落ち合ふ地點の左岸の部落である、神川村字畑山である。上田温泉の電車便をかりて、上田驛から大枚三十數錢を投ずれば、二、三十分にして本原驛に到着し、大畑新道に出で傍陽縣道を下る事二、三町にして、左手の道を行けば二百貫以上の重荷は通行を禁止すと云ふ立札のある黒塗りの狭い橋が神川に架つて居る。この橋を渡れば畑山である。こゝには先年信濃電燈會社と合併した、二百五十キロ、ワットの發電機一台と三百七十五馬力の水車を有する、小さな上田電燈會社がある。

爺さんの家は昔村上義清が住んで居た砥石の城の懸涯と東太郎山の麓にある。爺さんの家の庭先まで砥石の城を見ると、いかに村上義清が武田信玄の爲めに米山城、砥石城を落されて川中島に行き、越後の上杉謙信に救ひを求めた悪戦苦闘の跡を偲ぶには充分である。いかにも砥石城から箭でも飛んで來る様な殺氣立つた峻険な山である。爺さんの家の西側は今桑畑になつて居るが此處は今でも寺屋敷と云ふて居る。昔神川村字上青木の龍洞院とい

ふお寺があつた所ださうです。その寺屋敷の北側即ち畑山の鎮守の森の上の處に首平と云ふ所がある。こゝは村上義清が自分の臣下で悪い事をしたものはこゝで首を切つた處だとか。こんな歴史的事を知つて居るか居らないかは知らないが、鶯や豆蔴を告げる郭公鳥が一人天下で爽朗な聲で鳴いて居るのは何となく可愛らしい。

この畑山と云ふのは十五、六年前は伊勢山分であつたが分れて畑山區になつたのである。それで爺さんは今の伊勢山區の五代も續いた古い鬻種家に呱呱の聲をあげたのである。時はこれ嘉永三年三月一日であつた。十七、八歳の年盛りには神川村一の力持ちで五、六十貫位のものなら樂々と持ち上げたとの事である。秋の収穫の眞最中には七斗入れ位の野俵を二俵位平氣の平座で、話をしながら擔いで來たと云ふ事である。

不幸にも二十五歳の時祝融に遭ひ、家屋財産諸共に灰燼に歸し着物一枚残さなかつた。そこで二十七、八歳の時今の伊勢山から畑山へ來て、齋のみ齋の儘の全くの裸一貫で借家住ひで働いた。その當時は實際無茶苦茶に働くのが何より面白かつたと云ふ事である。その頃少し金を溜め始め、人の潰れた土藏を安く買ひ求めて家を造つた。その家の周圍の下屋や台所は自分の暇の時に杣樺を頼んで來て、大日向山に行き、何でも大きい栗の木は丈夫とかで、矢鱈に澤山切つて來て、手斧で削つた儘のもので作つたのである。今實家へ行つて見ると、鴨居でも柱でも梁でも皆齧で焚く煙の爲めに、漆の知く黒光りに光つて居るけれども、歴然と手斧

の跡が光の反射で實に立派に光つてゐる。實際飽で滑べ滑べに削つたものより、どの位興味深いかに判らない。いかに爺さん達が苦勞したかは、その柱その鴨居その土台を見れば明瞭に判るのである。

家も出來たので村人の信用は頼にありがた、山等を借し度いと云ふ人が山程出て來たので爺さんは早速山を借りて、何でも構わず朝早くから開墾に出掛け、見事な桑畑を作つた。それ以來畑山中で爺さんの位桑植をした人はなかつた。村人で桑畑を作る時は必ず爺さんを頼んで來て七、八十坪にどの位の距離で何本植えてよいか、又どの位の深さに植えてよいか、實地指導をして貰つたものだ云ふ。それ故八十近い年寄りの人達は爺さんの事を、畑山の桑植の元祖だと云ふて居る。桑畑も澤山出來たし、昔自分の家が五代も續いた鬻種家であつたから、直ちに鬻種製造を始めた。

これは日露戦争の始まる八、九年前の事である。何回飼育する鬻も鬻も農作に又農作、近頃の様な違作は唯の一回も無く、豊年の年等は二度も三度も鬻棚が倒れ損ふたと云ふ。その爲めに働く事が愈々面白くなつて、人一倍の苦勞も何とも思はなかつた。それ故屋敷を買ひ、畑を買ひ、田を買ひ遂に土藏まで造つた。親から分れる時貰つたものは身体丈けであつた爺さんも、忽ち暮し向きが樂になつた。その當時本家が古い鬻種家であつたので、春鬻だけは元菓を本家によつて、今の分場と同じ制度でやつて居た。選藏した上等の元菓丈けで五百丸入れの鬻籠が八、九十枚は取つたと云ふからたいしたものである。夏鬻は自分で採種して、この界限

の村に販賣して歩いたとの事である。本家では爺さんの飼つた元裏で何度も何度も品評會で一等賞を取つたが判らなかつた程それ程鬻飼が上手であつた。それだからその當時は鬻と云ふものは飼ひさへすれば當るものだと思つて居たらしい。こんな所から近年打續く夏秋鬻運作を考へた時、鬻寮に日が當つても何でも、手斧の形の附いて居る鬻寮で鬻を飼はなければ、鬻は決して當るものでないと云ふ事が熟々感するのである。そのうち日露戰爭が始まつた。二人の伴は何れも戦池へ出征した。そこで三百枚以上の鬻籠も空しく物置に入れられてしまつたとの事である。

偶々春蠶には能登の國から日傭取りが来て、能登は山に桑が何程でもあるし、然も貰ふ程桑が安いから、是非能登へ来て夏鬻を廣めて呉れと懇々と眞劍に勧めたので、遂行く氣になつた。そこで兎に角鬻を飼ふ場所や桑の状態や鬻道具を見に出發する事になつた。その時婆さんも俺も一緒に行き度いと云ふた所が、能登の日傭取りが親不知、子不知と云ふ所等は海が荒れて何時死ぬか判らないからとの話だつたので、婆さんも爺さんと一處に行く事を斷念した。

愈々現場に行つて實地調査をした處が、鬻道具を貸す約束をした人が鬻道具を少しも借して呉れない。又山の桑を見切りで賣つて呉れる人が一人もない。それ故鬻は掃いても鬻の大きくなるにつれて鬻に適當した熟度の葉を柄んで来て呉れる事が出来ない。そして桑を二百匁許り軟い所を取つて来て呉れと頼めば、硬い葉を二貫目位持つて来て、何度も聲を入れたとの事である。そうか

と云ふて山の桑を見回りで賣つて呉れる人がないから困まつてしまつた。能登の人は自分の桑は自分で取つて来て一貫目二貫目を單位として取引するものだと考へて居たらしい。それも無理はない事である、その當時葉桑一貫目が安い時は三錢高い時でも五錢だつたからである。こんな事から鬻が思ふ様に行かなかつたので爺さんも亦死を脱いで、又元のうら寒き信濃路に歸る事にした。兎に角國に歸るにしても何か儲けなければならぬと思ひ、丁度信州は年の暮れではあつたし、越中から年取り魚でも買つて持つて行つてうんと儲け様と考へ、暮の新巻の上等百匁二錢五厘か三錢と云ふ鮭を六、七十圓買つて意氣揚々と歸路についたのである。所が天は無情か、濱は荒れに荒れて船の中の魚は無慘にも陸に投げ出さなければならなかつた。大部分の鮭は陸に引き上げたが砂だらけになつたのは閉口した。流石の爺さんも小癩に障り何と云ふても信州は年末であるし、魚位で儲けなければ何と云ふても婆さんに濟まなれと思つて、今度は直江津で鮭は繼けて鮒を多量に買つて来た。その鮒や鮭を賣る爲めに二貫匁秤の棒秤を一緒に買つて来た。今でも畑山の實家に行くと台所の眞暗い所にその秤が昔戀しさに泣いて居る。これは今から四十年前の話だがこの時こそは大部損をしたらしい。

もう三十五年位前であらう。息子の安藏さんが十五歳の時である。爺さんは同年輩の三人と共に伊勢參拜に出掛けた。その時分伊勢二十日と云ふて木曾路を下つて名古屋屋に出てそれから伊勢に參拜して歸つて來ると二十日はかゝつたものである。四人は仲よ

く一日二、三十錢の旅籠に泊つて木曾路を下つて伊勢參りを濟まし、歸途奥の山の伴僧坊さんのお寺を參詣して、三方ヶ原を下り遠州濱松に出て、濱松から東海道線に乗り横濱を見物して東京に行き東京見物をした。四人の内で一人の人は東京見物最中赤毛布を落してしまつたとは、これこそ本物の物笑ひの赤毛布であつた。東京見物も無事に濟まして、成田様へ參拜して上野に出で、上野から汽車に乗り碓氷峠を越して上田まで乗つて來れば良いのに、小諸まで來ればもう上田に來たも同じだと云ふところで、小諸驛で下車して上田まで歩いて來て、又畑山まで得々として歸つて來たとの事である。この旅行にかゝつた日數は二十三日間であつた。伊勢二十日と云ふのに横濱、東京、成田を通つて二十三日とは余程の健脚家でなければ出來ない旅だつた、村人も皆その豪傑振りには舌を卷かないものは無かつた。この時旅行した四人は今も尚ピン／＼として、昔物語りに花を咲かして居る。そのうちで一番の年長者は爺さんでしかも爺さんが先達であつたのである。

婆さんは一口に松本のもと云ふて居るが、實は松本の在の南安曇郡瀧村字榎で安政三年四月十一日に生れたのである。婆さんの家は昔は酒屋であつたが、掛持ちの家へ酒屋を譲り、専ら百姓をして居つた。婆さんは生來元氣よく活潑であつた。親戚の家で手習躰を聞いて居つたので、婆さんが八歳の時僅か塾に通ひ始め十歳頃も塾へ行つたり、繭を掻いたり、田の草を取つたりして居つた。その頃の手習躰では平假名や長平假名のみを教へ今の様な

片假名は一字も習はなかつた。本字は「組ぐくし」と云ふて穂高十七ヶ村等と云ふて部落の名前を並べたり、村の人の名字や名前を列記して本字を習つたものである。それ故東寮に居られた諸兄は誰でも思ひ付くであらうが、あの東寮の献立表にこひ。らいすかれい。さつまじる。やつこ。やさい。ごもくめし。にくめし。いりどうふ。等と炊事當番が墨黒々と肉太く、一週間位書いて置いても婆さんは何時も間違ひなく炊事をなされたのはこの時習つたものだそうです。或時塾の歸り塾の御師匠様の家の稲苗代を、二人の友達と無邪氣にも面白半分にゲンヤ／＼捏ね歩るいた。

そこで師匠様に大變叱られ御師匠様の家の稲苗代を、二人の友達と無邪氣にも面白半分にゲンヤ／＼捏ね歩るいた。元氣の良い婆さんは眞暗な土蔵の中で二人の友達と一所に單筋の抽出を引き出し、その中にあつた糸を矢體無性に屑々にしたのでその後は悪い事をして、遺の師匠様も諦めて土蔵には入れなかつたそうである。

その當時この師匠さんの手習躰に通つた人は極めて稀で瀧村で通つた人は女が三人、男が二十人であつた。この女の三人の中の一人は婆さんであつたのである。

婆さんも年頃になり、働き盛りとなつた。家の人達は婆さんを上田にやつて上田の本場で一つ鬻伺ひを覚えさせ様との相談が纏まつてしまつた。遂にうら若き身を以て上田地方の鬻種家へ鬻手傳に來たのであつた。婆さんは十八、九の頃は男にも負けない氣であつた。桑畑等へ行つても男が大東の桑束を四束背負ふと婆さんも四束背負つた。同じ鬻手傳に來て居た男も婆さんには迫も適

はなかつた。そんな所から働き手の爺さんは遂に見初めて戀に落ちてしまった。そして上田地方の鬮飼をすっかり覚え込んで松本に歸らんとした時にはもうすっかり固い固い偕老の契が結ばれてしまった。

爺さんが裸一貫から家を造り、田畑を買ひ、土蔵を造り、五人の小供を立派に養育したのは、爺さんの働きと共に婆さんの内助の功が預かつて力がある。婆さんには三人の女の子と二人の男の子がある。一人の女の子は九歳の時夭折した。この子は兄弟一利口で、學校の成績も非常によく出来て、優等の免狀を貰つたが爺さんにも婆さんにも見せなかつた。その優等の免狀が死んでから後で始めて判つたので、一層泣かされたと今でも涙を出して婆さんは話をする。次の娘は辰年で今年生きて居れば三十八歳になるが七年許り前に死んでしまった。九州のお天神様のある大宰府の近くの某製糸工場へ嫁に行き九州帝國大學病院で一ヶ月程病んで亡くなつたのである。その時婆さんは嫁に連れられて九州に行つた。婆さんに「九州に行つた時、何處が一番面白かつた」と尋ねると「別府が一番よくてせい。あれでもその次ぎは博多だと思ふが行つて見たかい。行つて見まし。いゝ處だぞい」と吹かれる。「お天神様はどうでしたか」と聞くと「良い處せい。ふるしい梅」と三人で一抱へ位の大きな松が繁適にいゝぞい」と云ふ。こんな話は東寮に居つた學生は誰もが聞かされた話であらう。もう一人の娘は婆さんが四十二歳の時に生んだ末子で今年三十三歳である。この方は婆さんの弟の小松重吉と云ふ息子の幸吉さんの處へ

お嫁に行つて居る。重吉さんの家ではこの嫁さんを貰ふから大變鬮が當り出して、大分この家の様子を良くしたやうである。重吉さんは六十九歳で今年の春上田に来て「嫁が鬮を上手で當てるからえらい暮しが樂になつた」と喜んで居た。

息は二人共筋骨隆々たる爺さんに負けない体格で二人とも甲種合格で二人揃つて日露戰爭に出征した。總領の安藏さんは今年五十歳である。明治三十七年五月滿州に上陸し、乃木三軍に加はつて旅順を陥落し、最後に野津大將の第四軍に編入され奉天攻撃をなし、三十九年の四月凱旋し、かしこきあたりから勳八等白色桐葉章に金二百圓を賜つた。弟さんは今年四十七歳で三十八年の二月出征し、この方も亦その功勞により勳八等瑞製章と金七十圓を下賜せられた。實にこの親ありてこの子ありの感に打たれるのである。

兄弟打ち揃つて凱旋はしたが戦地にて多量の酒を飲む悪弊に陥り、兄は信濃電燈會社へ十二、三年勤めて今は實家で百姓をして居る。弟の方は日露戰爭より歸り酒癖悪く、東京邊までも女郎買ひに行き、甲州邊へも行き、澤山の金を使つたので借金が莫大の額になり、折角若い時爺さんと婆さんとで汗垂らして買つた田地を賣つて子供の借金を切つて呉れなければならなかつた。これも自分の生んだ子であると思ふからである。實に親は有難いものである。學校の十年祝ひの時婆さんは古東幹太さんに連れられて弟の居る神戸に行つて來た。行つて見ると上田の金持ちの畑金さんに家を貰つて立派な暮しをして居た。神戸に行つた時親戚である

如金さんの案内で京大阪、姫路、奈良等を見物して歩いた。いつも得意になつてこの時分の話に花を咲かせるのである。姫路の御殿の横手に井戸があつてせい。その井戸を覗いて見ると金網がかゝつて居てせい。其時これはお菊のテッサン皿屋敷ではないかと案内人に尋ねたら、そうだったとか話をする。慥か芝居で見たのと符合したらしい。婆さん京大阪では何が一番よかつたかいと尋ねて見ると「京都のお芝居せい。大きい劇場でせい。その芝居はとてまいゝだぜい。綺羅はいゝし、その景色がせい、逆もいゝだぜい——胸に有つて出て来ないが、あのせい。あれは……何んだつたけ。うんそうだ。あのせい仙台様の女郎遊びせい。仙台様が雀の紋附の着物を着て、態々女郎を買ひ上げに行く所がせい、中々よく出来て居てせい……高尾の首を拾つて本願寺に付けてせい。自分で切腹する所がまたよく作つてあつてせい。俺も上田劇場で一度、上田に昔あつた中村座で二度見たがせい。あんなにいゝのはなかつたぜい。」と感心して話をするのである。

爺さんと婆さんが東寮に來たのは二人の息子が日露戦争から歸へつて來て皆元氣良く酒を飲んで大きな借金をしたので、一生懸命かまけて買った田地を賣つて借金を返済してやつたのは前記の如くである。息子二人はのらくらになるし、もう昔の様に田畑がなくして鬻も飼へないし、作も出来ないの、家は息子の安藏さんに譲つて、爺さんと婆さんは東寮に來て只管東寮のために盡瘁せられたのである。東寮の炊事は始め大家の龜屋でして居つたが何かの理由で九月から今の爺さんが一手に引き受ける事

になつた。東寮に來た許りは學生の數は十七、八人であつたが、十七、八人の食物かまけをする道具がなくて不便が多かつたから厭になつて家へ歸へらんとしたが代りの人も見附からず、大變婆さんに叱られ、今度は二人でやる事になつた。それ以來十九年の長い間唯の一度でも休んだことなく、十九年一日の如く蔭陽なく働いて呉れたのである。最初の東寮には擔一荷と手桶二つと小桶が少しあつただけで、水を汲み溜めて置く甕もなく、爐も極めて不充分であつた。冬等爐に銅壺もないので食器類を洗ふ時や雜布掛けをするのに一々湯を沸して用ひなければならなかつた。そこで爺さんが粘土を貰つて來て銅壺を附けて現在の爐を作ると共に鍋や釜や其他の什器は家から持つて來たものが多かつた。その當時一番不便だつたのは學生が米櫃に錠を掛けて置いた事である。若しも錠を持つて居る學生が學校から早く歸つて來なければ夕飯等炊けない事が時々あつた。そこでそれでは困ると云ふ譯で婆さんが學生と強剛に談判して、遂に米櫃に錠がなくなつたのである。その内に東寮から原田兵衛さんを筆頭に偉い人が卒業する種になつたので、それも唯一の楽しみに愉快に十九年を過して來たのである。それだから東寮に居つて一番うれしく又樂しかつたのは何ですかと尋ねると「子供の様な學生さんが卒業の時には立派に成人して卒業し、卒業していゝ男になつて面會して呉れるのが何よりうれしかつた」と爺さんは答へた。

爺さんと婆さんの二人の俵付け最初は三圓、後に四圓になり、それから八圓になり、大正六、七年頃は日給が一日三十錢であつ

た。それが大正八年頃七十錢になつて現在に及んだのである。その間に貯蓄した金は千數百餘圓にのぼつて居るが皆息子の借金の爲めに支拂つて呉れてしまつたのである。

爺さんは毎春秋になると茸狩りや實家の息子の子を必ず見に行くのである。息子がどんな稻を作つたか、どんな畦豆が出来たか、桑畑には草が生えて居るかどうか見に行くのである。私も二年生の時に一處に行つた事がある。爺さんは息子の作つて居る田と畑を全部見極めてから實家に行き、「茸を取りに来たが今年は大分稻は良く出来たなあ。桑畑はえらいいぢめたものだなあ、涼しくなつて来ればどんな小さい草でも種が成るから草掻きをしろよ」と注意して溜息を付くのである。茸を東太郎山に取りに行く途中、この畑はこれでも若けい時開墾した畑だが息子が日露の戦争から歸へつて來てから酒癖は悪くなる、女郎遊びはするので遂えらい借金をしてその際に賣つて借金を切つて呉れた畑だと涙を出して話をされた。自分もとうとう貰ひ泣きをしてしまつた。

爺さんは又眞面目な本當に神様の様な人である。何か仕事を頼むと何時も「へー」と云ふ返事をされる。丁度可愛らしい綺麗な娘さんにでも透き通る様な際で「ハイ」と返事をされた時の氣持と少しも變りはない。秋も末になつて寒い日が何日も續いたのである。朝早い爲め手足は覺えない様になるので、爺さんは自分の家から持つて來た炬燵檯で炬燵を作つて御飯を炊いた燃え残りの軽い炭を入れて暖まるのである。時々黒戯らな學生が爺さんの邊さんも居らない時に娯樂室へ炬燵檯を持つて來て、折角爺さ

んが眞赤にかんかんとおこしてあつた炭火を入れて臨時に炬燵を作つて、小説を讀んだり、將棋や碁をやる事がある。これは無作法の學生の仕事ではあるが爺さんは俺達は學生さんが炬燵を作らない内に炬燵を作るから學生さんが怒つたんだと考へて、翌朝からは手の切れる様な寒い日も我慢をして炬燵檯を戸棚の上に投げ上げて幾日も幾日も寒さでふるえて居た事もあつた。

年末年始の休みとか、三月の試験休みとか、暑中休暇とかの前になつて學生が居らなくなる様になると必ず爺さんはその月の炊事委員を呼んで、皆さん休みになるが米が四升に茶碗に二杯許りと味噌が二回分、醬油が一升壺に半分とか、砂糖はこれだけ残つたとか必ず一々見せて呉れる。そして休みも済んで學期始めになると必ず又見せて呉れる。實際我々はその心盡くしには生きて居る神様より外には思はれない。

お爺さんの一番好きなのは相撲とお酒である。それだから科野大宮神社とか、この近邊に相撲があれば吃度二合壺を手拭で腰にぶる下げて烏打帽子をかぶつて茶色掛つた家織りの小鞆の蓑物に羽織を着て杖をついて出掛けるのである。爺さんは若い時は非常に酒が好きで二升や三升位なら平氣で平げたらしい。今でも二、三合は晩酌を毎日でもやり度いのであるが、婆さんが「これお前學生さんは學校の規則で酒を飲んではいけない事になつて居るぞい。それだから學生さんが居らない時なら飲んでも良いが、若し學生様が眞似をしたら困るぞい。俺達はこれせい、文部省から抱へられて居るぞい」と自分の芝居を見に行くのは棚へ上げて



置くのである。それ故爺さんは飲み度い酒も婆さんの爲に我慢して正月の休みに二升、三月の試験休みに一升、暑中休暇に饒耐一升位である。そしてその酒を飲むにも成るべく學生の居らない様な時台所の戸棚の方を向いて、眞赤におきた炭火の上で學生が化学實驗か何かの時に持つて来た三角瓶に一、二合入て沸して飲むのである。その外にお酒を飲むのは黒比須講とか科野大宮神社のお祭りに婆さんから五十錢位小使を買つて、常入新町の小林と云ふ賣物屋の前の酒屋あたりでコップに一杯位飲んで、例の鳥打帽子をかぶつて来る位のものである。爺さんは何時も月給を學校から二十一圓程貰つて来ると、全部の金を婆さんに提供して自分では一錢も貰ふ様な事はない。妻を持つ夫は實にかくあるべきである。休み休みに買ふお酒も婆さんが「さあ學生さんが居らなくなるからお酒を買つて来てお飲み」と云ふて一圓五十錢渡されるから買ふのである。

或日茸狩の歸途であつた。突然昔馴染みの伊勢參りの八十近い老人と邂逅した。爺さんの喜びは一通りではない。「まあ久振りだない。あんたも年取つても道者でまだ上田で働いて居るだない……」と老人が云ふと、爺さんが「俺もこんな白い頭になつても一生苦勞して……」と云ひながらてく〜一寸一杯屋に入つて行つて、まあ一杯飲みやしようと思ふて戀人にでも合つた様な調子で飲んで居た。そのうちに爺さんが「俺も息子運が悪くてさあ。生きて居る間も少ねいから働けるだけ働きやしよう」と云ふて別れた。時は黄昏近くであつた。蛇澤を過ぎ日の出町に差掛つた時、鳥帽子

の山の端から圓い〜十五夜のお月様がムク〜と昇つた。爺さんの月の譚辭は詩人以上であつたに相違ない。俺も今年で七十八年になるが、こんな良い十五夜の月を見た事がないと云ひながら又日の出町の高橋と云ふ菓子店に突然入つた。自分は何の用事が入つたのか知らなかつた。すると爺さんはしつかりは覚えがないが二十錢位と思つたが、蕎麥粉の打物を買つて、その店からお盆を借りてお月夜様を供へた。一、二分の後何かお祈りをしたかと思ふと、外に居つた私を呼んでお月夜様の御供物を頂きましようと思つて遂引張り込まれてしまつた。その時の爺さんのお祈りは果して何であつたらうか。

婆さんは大の芝居好きで芝居の事をシベいと云ふてゐる。婆さんは年々毎日と云ふてもよい位見に行くのであるが、大抵五錢芝居なので一ヶ月見に行つても一圓五十錢とは悪口だが、澤正の様な本場の芝居が来れば必ず畑山から嫁を上田に呼び寄せて見に行くのが常である。婆さんは芝居を見に行く時は何時も夕飯の用意を濟まして三時頃宮櫻の風呂に行き、少しくおめかしをして劇場に行くのである。婆さんシャンになつたぞいと云へば、一寸はシヤンにならなければ人に見臭いからと云ふて必ずよを行きの着物に着換へて出掛けて行くのである。又婆さんの様に太つた人にとつては毎晩の位見に行く方が身体具合も良いし、よく聽れるのである。いつも婆さんは一生懸命に芝居を見て居るので人情のこまやかな泣かされる様な場面があれば長く胸に落ちて漣々と泣いて来るらしい。昨日の芝居は泣けたかいと云へば「本當に泣けたよ

俺の傍に隠居と機織工女が三人許り居たが泣かなければならぬ様に出来て居る芝居を見乍ら、居寝むりをしたり、何か食べて居てせい。本當に俺が芝居をやる人ならばん擲つてやりたい様だつた」と時々云ふのである。本當に劇そのものに趣味を持つて、劇そのものに心を打込んで芝居士と一處になつて、何も彼も忘れて見て居るからである。

冗談半分に學生が、婆さん上田でシヤンの娘があつたら世話して下さいとからかふと「どうも上田にはシヤンは居らない様だぞい。俺が男ならうんと立派な男になつて、東京へ行つて高い靴で袴でも穿いて居るシヤンを貰ふぞい」と云はれて、學生も一本參る事がある。こんな様に婆さんは中々口達者で誰にも負けない氣がある。若し學生が下手に婆さんをかからかふものなら、大抵の學生はやり込められてしまふ。そして婆さんは何時も俺達は文部省から抱へられて居ると云ふ信念の下に、小さい東察の女王と考へて居るのである。そして元氣の良い東察の學生を自分の民の様に思つてゐるから愛と義務との境を越えて一歩も足を出した事がないのである。

毎年四月になると新入生が来るのであるが、皆立派に婆さんに躰けられてしまふ。若し新入生が食卓に御飯粒や醬油の零れでもあると、吃度顔を擱んで誰々さんの様に御飯をこぼすやうでは出世はしませんよと云ふ。それ故學生は全部御飯をごぼす人もなければ、又飲まんとしたお湯を其儘にして置く様な無作法の學生は一人も無いのである。こんな關係から東察の學生全部は、従令そ

れが不味い料理であつても、皆な旨い〜と云ふて食べる様になるのである。又學生が草履でぬかるみを歩いて來たり、泥足の儘で家の中へ飛び込んで來ると必ず「足位は拭いてお上がりよ若し東察が自分の家であつたら泥足で上がれますか」と叱り飛ばされる事もある。

東察の爺さんと婆さんは近所の人や、内情をよく知らない學生や先生は大分金を溜めた様に思つて居るがそれは誤解の甚しいものである。大正六、七年頃爺さんと婆さんの二人の月給は三十錢であつた。それが大正八年頃昇給してやつと七十錢になつた丈である。毎月二十三日になると二十一、二圓の金を學校から貰つて來る。そうすると婆さんは二、三圓の小使を残して後は全部信濃銀行へ預金するのである。そして六、七ヶ月も經つと百圓以上になるので早速百圓の定期預金をするのが常である。こんな話に一年には必ず百圓の定期預金が二本は出來るのである。こんな話ばかり聞いて居ると、いかにも金が溜り過ぎて困るだろうとお思ひの方もありませんが、その心配は御無用です。爺さんと婆さんが少し金が溜まる頃になると爺さんと婆さんの好きな醬麥を持つて金を無條件で借りに來る人があります。それは畑山の總領の息子です。去年は春蠶も夏蠶も秋蠶も全部違つて、肥料代も支拂へないから、今年の春は一つ儲かる山でも買つて、寒いうちに少し働いて肥料代だけでも拂ひ度いから是非二百圓貸して呉れとやつて來る。婆さんは因例如例必ず息子が金借りに來ると叱り飛ばすのが常である。そのうちに翌朝になると爺さんが「金なんか残して置

いてもどうせあのものだし、あれも一生懸命にやる積りの様だから丁度二百圓位はあるから、やつたが良い」と云ふと婆さんは怒り乍らも二百圓をすぐに銀行から下げて来る。しかも爺さんはその二百圓を息子の家まで持つて行つて来るのである。その秋息子も又金を欲しそうにやつて来た。果せる哉。今年も春鬻が少し良かつたから九尺二間の物置を作り始めたが百圓貸して呉れないかやつて来る。今度は婆さんも爺さんも少しも怒りも叱りもしない。家を作るならいくらかゝつても仕方が無いと云ふて又百圓の金を喜んで調達してやるのである。

又息子の安藏さんの長男が今年二十三で去年松本の五十聯隊へ入隊して、濟南城の攻撃に参加したのであるが、そのお孫さんの徴兵検査の支度即ちセルの袴や着物、羽織等一揃六、七十圓も出して作つてやつた事もある。尙又打ち續く夏秋鬻運作の爲めに毎年年末になると年取り金がなくなり、人並に魚や酒や惣酢も買へない所か、餅も揚げ無い事がある。そこで婆さんは毎年夏鬻を秋鬻が満つた時は孫共には下駄を買つて行つて呉れ、息子には年取金を三、四十圓呉れるのである。或年の暮れであつた。婆さんが年取り金を持つて行つた時である。嫁の箆笥を抽き出して見ると着物は一枚もなかつたので、息子と嫁を慟々に叱つたとの事である。翌日に東寮に歸るや否や參拾圓で豫の着物や金時計を質受けして来た事もあつた。これは私が上田に三年間居つた時の實際の話である。

こんな具合に零細な儲か二人で一日七十錢と云ふ日給でありながら、百圓貳百圓と纏まつた金を毎年々々無條件で提供して居る

のである。實際これを考へる時、子を持つ親の苦しみを孰々感ずるのである。自分の息子が借金するのは自分が借金したと同様の責任を感じて居るのである。親は實に有難いものである。

これに依つて私は爺さんと婆さんが澤山金を溜めて引退したかの如く考へて居る人々の誤解を一掃し併せて御同情を得たいと思ひます。

就きましては今回在田東寮卒業生加美好男氏、高木三治氏及窪田潤氏等の諸先輩が色々御心配下されまして、東寮に一日でも一ヶ月でも居られた方々は勿論置く東寮に關係のあつた諸先輩諸先生方からも寄附金を募集し、以て神様の様な東寮のお爺さんとお婆さんの養老金及謝恩金として贈呈すべく目下計畫準備中であります。心ある人よ、奮つてこの舉に賛せられん事を。

親愛なる東寮百三十五名の卒業生諸君よ。

勇敢にして仁愛に富める東寮の卒業生諸君よ。

曠然として起て、起つて而して我が東寮の恩人である神様の様なお爺さんとお婆さんの爲めに、母校二十周年記念事業と相俟つて盛大なる表彰をしやうではありませんか。終り。

(昭和四年六月二十九日)